



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 8 月 2 日 (土)

発行 館長 加藤 智 一

今年セミ鳴いてる？



私だけだろうか、今年の夏、異常にセミが静かだと思っているのは。もしそうだとしたら、

どんな理由が考えられるでしょうか。

(1) 異常気象による羽化の失敗説

セミは地中で数年を過ごし、地温が 18~23℃程度になると羽化します。今年は梅雨が短く、梅雨明け直後に猛暑 (35℃超) が続いたことで、地中の温度が急激に変化したと考えられます。この温度変化により、羽化のタイミングが狂い、成虫になれなかった個体が多かったのではないかと思います。

(2) 猛暑による活動低下説

セミは 30~33℃程度で活発に鳴きますが、35℃を超えると体力を消耗し、鳴くのを控える傾向があります。実際、鳴き声が聞こえるのは早朝や夕方など、比較的涼しい時間帯に限られているようです。

(3) 空梅雨による土壌環境の悪化説

通常、梅雨の雨で土が柔らかくなり、幼虫が地表に出やすくなります。しかし今年は雨量が少なく、土が乾燥して硬くなり、羽化できない地域もあると報告されています。

(4) 都市化や環境変化の影響説

都市部では舗装や樹木の減少により、セミの幼虫が育つ土壌環境が悪化していると考えられます。これも個体数の減少につながっている可能性があります。

一部の研究では、羽化が遅れたセミが 8 月以降に一斉に出てくる可能性もあるとされています。ただし、成虫の寿命は短いため、鳴き声が戻っても一時的になるかもしれません。セミの鳴き声は、夏の風物詩であると同時に、自然環境の微妙なバランスを映す鏡でもあります。今年の静けさは、気候変動の影響を身近に感じるサインかもしれません。

山形花笠まつり

山形の魂を踊る「花笠まつり」、そのルーツは、大正時代に始まった民謡「花笠音頭」にあります。これは、山形県尾花沢市で道路工事の作業員たちが歌った「土つき唄」から派生したと言われています。

昭和 30 年代に観光振興の一環として市民踊りパレードが始まり、「花笠音頭」に合わせて踊る様式が定着しました。現在の祭りは 1963 年 (昭和 38 年) に第 1 回目が開催され、以来 60 年以上の歴史を刻んでいます。「花笠まつり」の踊りには「正調花笠踊り」と「変化踊り」の二種類があります。「正調花笠踊り」は伝統的な踊りで、手の動きやステップに独特の所作があり、しなやかで優雅。「ヤッショ、マカショ」という掛け声とともに、踊り手は右回りに進行しながら一糸乱れぬ隊列を保ちます。一方、「変化踊り」は団体ごとの自由な創作が加えられたもので、企業や団体、学校などが趣向を凝らした衣装や踊りで観客を楽しませます。そして「花笠まつり」を語る上で欠かせないのが「花笠音頭」です。踊りとともに鳴り響く「ヤッショ、マカショ！」という掛け声は、観客の気持ちを一気に引き込み、祭りの一体感を生み出します。祭り期間中、市街地には約 1 万人以上の踊り手が参加し、総延長約 1.2km のパレードルートを埋め尽くします。沿道には観客が立ち並び、地元の商店街や飲食店も一体となって祭りを盛り上げます。近年では、子どもたちや若者の参加が増え、「花笠まつり」は世代を超えて山形のアイデンティティを共有する場として機能しているように思えます。踊りの技術や衣装づくり、音頭の伝承など、地域の学校や団体が積極的に関わることで、祭り文化が次世代に引き継がれています。また、2020 年代以降はオンライン配信やインバウンド観光への対応も進み、山形の魅力を世界へ発信する新たな試みも始まっているようです。山形の夏を彩る「花笠まつり」は、単なる季節のイベントではありません。それは土地の記憶であり、音頭に刻まれた歴史の声であり、踊る一人ひとりに託された山形人の誇りです。笠が花を纏い、音頭が街に響く三日間、山形は祭りそのものになります。

